

(様式 7)

平成 28 年度秋田県ジオパーク研究助成事業

Web 公開用研究成果概要

所 属	秋田県立博物館
氏 名	吉川耕太郎

研究テーマ	旧石器・縄文時代における男鹿産黒曜石の利用と拡散について
-------	------------------------------

関連分野	考古学
------	-----

対象フィールド	男鹿半島・大瀧ジオパーク
---------	--------------

キーワード	黒曜石製遺物 旧石器時代 縄文時代
-------	-------------------------

 <p>八峰白神ジオパーク Hoppo-Shirokami Geopark</p> <p>男鹿半島・大瀧ジオパーク</p> <p>ゆざわジオパーク</p> <p>Mt. Chokai & Tobishima Island Geopark 鳥海山・飛島ジオパーク</p>	<p>本研究成果概要は秋田県ジオパーク連絡協議会 による「平成 28 年度秋田県ジオパーク研究助成 事業」公募研究に採択された研究の成果である。</p>
---	--

秋田県ジオパーク連絡協議会

研究成果概要 (A4 用紙で 1 枚程度)

1. 本調査研究の目的

日本列島の旧石器・縄文時代における三大石器石材として黒曜石・珪質頁岩・サヌカイトが挙げられる。東北地方は珪質頁岩が石器の主原料であるが、わずかながら黒曜石の利用も認められ、その産地も 15 箇所ほど知られている。従来、東北地方では、黒曜石はマイナーな存在として研究上さほど重視されてこなかったが、蛍光 X 線分析による非破壊の理化学的産地推定分析が行え、ヒトとモノの動きを研究する上で非常に有用な情報を有する。とくに東北地方の中でも男鹿産黒曜石は透明度が高く不純物が少ない高品質の石室で知られており、東北各地で出土が報告されているものの、旧石器時代から縄文時代を通してその利用と拡散について通時的に研究された事例はない。ゆえに本研究では、旧石器時代から縄文時代を通して男鹿産黒曜石がどのように利用され、拡散したかを研究する。

2. 調査研究の方法

文献調査によりこれまでの研究史を整理するとともに、遺跡発掘調査報告書を収集し、産地推定分析の結果をデータベース化する。これに基づき、実際の資料を実見し、利用の実態を把握する。必要に応じて蛍光 X 線による産地推定分析を実施する。あわせて男鹿半島周辺で踏査を実施し、黒曜石の産状を把握する。これらを集約して、旧石器時代から縄文時代にかけて男鹿産黒曜石がどのように開発され流通したのかを考察し、あわせて課題を浮き彫りにする。

3. 調査研究の結果

今回、蛍光 X 線分析により後期旧石器時代前半期中葉（今から約 33,000 年前）には男鹿産黒曜石の利用が始まったことが明らかになった。その後、同後半期後葉（今から約 20,000 年前）の槍先形尖頭器文化期に開発が本格化し、後続する細石刃文化期に至るまで東北一円～北陸・中部地方へと利用の拡散する様子が把握できた。秋田での利用よりも隣県で目立つ傾向にある。ところが、今から約 13,000 年前の縄文時代草創期～早期～前期前半（今から約 5,500 年前）にかけては男鹿産黒曜石の利用が低調となる。気候温暖化に伴った定住生活の本格化する前期後半～中期末（今から約 3,900 年前）、再び男鹿産黒曜石の利用が活発化する。この時、縄文海進により男鹿半島は島になることから黒曜石の流通には舟の利用も考慮される。利用の中心は石鏃やミニチュア石匙である。つぎに、気候が寒冷化する中期末～晩期末（今から約 2,300 年前）にかけて利用が急増するが、その内容は石鏃の他に墓域での儀礼的な使用が顕著となる傾向が伺えた。総じて縄文時代における男鹿産黒曜石の拡散範囲は秋田県を中心に青森県～岩手県にほぼ限られる。この範囲は前期～中期の円筒土器文化圏とほぼ一致する。その背景にどのようなヒトとモノの動きがあったのか、今後の検討課題である。

4. まとめ

本研究によって旧石器時代から縄文時代にかけての男鹿産黒曜石の利用と拡散について一様ではなく、気候変動や文化動態と密接に関わっていることが予測された。東北地方南部では黒曜石の産地推定分析事例自体が少ない現状が明らかとなった。東北地方南部でも遺跡から黒曜石製土器は出土しているので、今後それらの産地推定分析を進めることによって、より解像の高い黒曜石の利用と拡散の在り方を描出できると考えられた。